

図書館員として働いていく中で

平成14年度別府大学大学院・文学研究科卒・別府大学附属図書館

立花志保

別府大学附属図書館で働くようになってから1年がたとうとしています。母校に戻ってからの1年はあっという間でしたが、充実した毎日を送っています。

今回は、これから司書になりたいと思っている別府大学の学生たちに少しでも参考になればと思い、図書館での日々の業務や私の感じたことを書いていきたいと思います。

私は、別府大学で司書の資格を取得しました。大学4年の折に大分県立図書館での土日のアルバイトにつきました。土日は利用者も多く返却冊数が多いことから排架が主な仕事でした。正しく排架しなければ検索を行っても見つけることは困難ですし、排架の大切さを痛感し、より完璧に請求記号どおりに本を排架することを心がけてきました。大学院にも行ったことで学生時代の3年間、そして卒業してからは、平日業務を行う臨時職員として併せて4年間大分県立図書館でお世話になりました。臨時職員の一年間は貸出、返却も行いましたが、排架が1日の大半をしめました。ただ元に戻すだけでなく、利用者の立場にたった排架をより心がけていくよう努めました。たとえばスピードに関してですが、返却処理をしても排架していなければ、その間、利用者の目に触れない場に置かれることにもなり、少しでも早く排架しなければならないということ、また利用者が見やすいように背を手前に並べることや、取り出しやすいように排架するなど、日々排架においても利用者の立場にたって探しやすい方法はないだろうかと考えていくことの大切さを大分県立図書館で仕事をする中で学びました。

現在、私が行っている業務は本の貸出、返却やカウンター業務、排架などです。ほかには、紀要の受入や図書館のホームページの更新も行っています。5月には、他の図書館での実習を行う前に、別府大学の図書館でも一度実習を行うということで短大の2年生と大学4年生の学生が実習に来ました。私は貸出、返却と排架の指導を行いましたが、学生にとっては実際に自分の通っている図書館なわけですが、閲覧室はわかるものの積層書庫がどこにあるか知らない学生が多かったことが気になりました。電気をつけずに排架しようとしている姿や、手動式の移動書架を回して開けようとせずに横に押すなど、開けることのできない学生がいたことから、すべての学生というわけではないでしょうが、司書の講義を受けていても普段図書館を利用していない学生が多いのではないかと思います。

7月からの2ヶ月間は、図書館を開館しながら、司書講習の手伝いをしました。ある程度の期間がたち、講習生も本を探すことにだんだん慣れてきているようでしたが、その1冊の本を戻すということにおいては一般の利用者と同じように請求記号順に並んでいるという意識があまりないことや、その場所が間違っていれば次の利用者が困るのではないかという事にまで思い当たらないようだということを感じました。

1年間の業務を行っていくなかで、学生のために図書館の利用教育や案内・指導などを行う必要性があるということ、またどのような方法で行っていけばいいのだろうかと感じるようになりました。一度学べば理解できることをわからないまま卒業していくのでは勿体ないと思います。

そのためには、日々の業務の中で行う指導もあるでしょうし、そして新入生や学科に分けてそれぞれの指導なども行っていく必要があるように思います。また司書の資格を取得する学生に対しても、ただ取得するだけでなく身近な図書館での利用に活かしていくこと、そして図書館に関する講義を受け、頭で理解するだけでなく、実際の体験として「わかる」ということをもっと行っていくことができるように、図書館としてできることを探して行っていきたいと思います。私自身ができることはほんの少しかもしれませんが、利用者に毎日接している中で感じたことや学んだことを活かして、日々利用者に対するこころくばりをしていきたいと思っています。

(たちばな しほ)